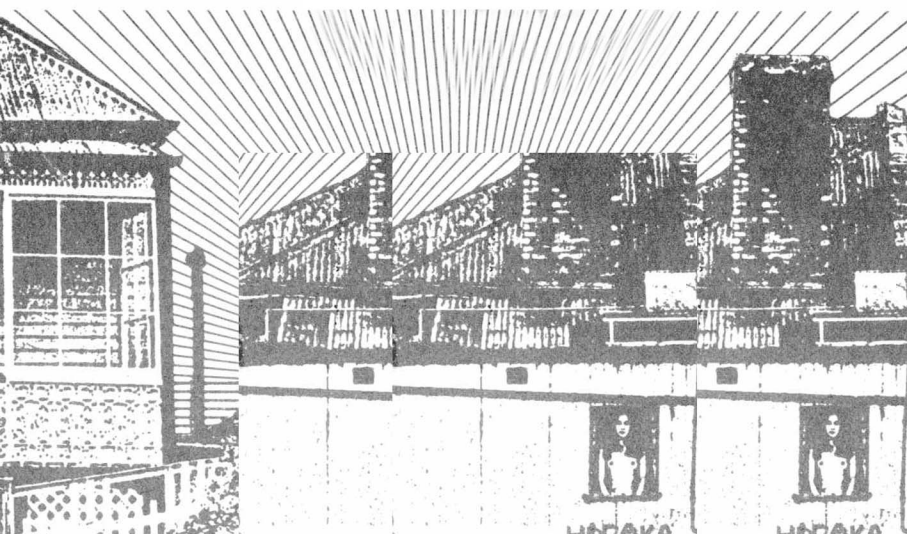


多恵子

河出書房新社

れて在る日々



扱はれて在る日々

© 1974

一九七四年十月十日 初版印刷

一九七四年十月十五日 初版発行

著者——河野多恵子

装幀——吉田穂高

発行者——中島隆之

発行所——株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六

電話……(〇三)二九二一三七一一

振替……東京一〇八〇二

印刷——東洋印刷

製本——和田製本

定価は帯・カバーにあります

目次

同胞（はらから）	5
特別な時間	39
うたがい	69
怪談	115
厄の神	141
変身	165
扱ばれて在る日々	211

扱ばれて在る日々

同

胞

(はらから)

或る残酷絵画の彩色写真を前にして、疑惟に耽っている日本女が、ここに居る。

彼女はかねて、グロテスクは嫌ではなかったはずなのだった。好きだといえないこともないらなかった。

いつか、知人がそういう気味の話を口にしかけて躊躇すると、彼が傍から言った。

「いや、グロテスクは好きなんだ」

と妻の彼女のことをそう言った。

その指摘ぶりに、彼女は少々誇張を感じた。自分の特性が、彼には実際以上に受け取られていくようにも感じた。彼がそう受け取りたがっているような気もした。

それから、彼女は突然、彼のその指摘ぶりに飽き足りなさを覚えた。すると、彼女は、自分のそういう特性が彼には寧ろ内輪に受け取られているような気がした。或いは、彼が内輪に受け取

りたく、内輪に受け取っているふりをし続けてきたようにも思われた。

そして、彼女は既にその一方で、彼は本当の彼女をありのままに感じており、その指摘よりも正しくそれに見合っていることを知っていた。彼女が、彼の指摘ぶりに戸惑ったのは、グロテスクは好きなのだ、という直截な言い方のせいだった。

どういうわけか、グロテスクの場合、彼女は好きだという言い方は、誰にとっても成り立たないと感じていた。グロテスクにどれほど気の弾む人間であっても、その感じは好きと評したのでは当たらない。嫌どころではない、こたえられない、とても言うしかないはずなのだ。彼が彼女と同胞であるからには、そうしたことを知らないはずはなかった。事実、彼はグロテスクの嫌ではない彼女や、グロテスクをわるくはないと感じている彼女に、適切な仕向けはしても、グロテスクは好きであると彼女を解しているような仕向けはしたことはなかった。彼女は、グロテスクの場合は、どういうわけか、グロテスクは好きであるという言い方は成り立たない、と思う自分の感じ方を、彼も又もち合わせていると感じている。が、グロテスクが嫌ではない彼女の特性を他人に言うには、グロテスクは好きである、という言い方になるのだろう。

写真の残酷絵画を前にして、彼女はそれが好きであるという言い方に結びつかない気持を再三感じ直した。が、嫌ではない感じも、わるくはない感じも、一向に生じてこないのだった。妙に苛立たしい気持が募ってきて、難詰したいほどなのである。彼女は、自分の特性を疑いさえし

た。その写真の絵画は、ひとつのグロテスクにはちがいないからだ。

彩色写真のその絵画は、薄緑が基調となっていた。処刑場なのか、拷問室なのか、高いところに、一条の陽の光の射し込む、小さな四角い窓があった。右手で、残酷者たちが男の皮を剥いでいた。荒々しい木の台に、男の軀を手前に向けて取り押え、内股から剥ぎおろした皮をそれが踵のところまで外れさえすれば爪先にまで達しそうなほど、引っ張っている。片ほうの肩から腕へかけても、同じことが行われていた。手首から先以外には皮はなく、しかも取り除かれた皮はその一端で手首に繫っていた。

残酷者たちの後ろに、彼等を宰領しているらしい、ひとりの別の残酷者が見える。彼は背後を振向いていたが、そこでは、もうひとつの刑罰か、拷問かが、行われているのだった。こちらの生贄は女で、後ろ手に縛って、立たせてある。片ほうの乳房が、失せていた。数人の残酷者たちのそれぞれに握りしめている鞭が、そこに集中し続けて、打ち落してしまったところらしく見える。

女は髪を乱して、頭をのけぞらしていた。まだ死んではいけないことが判るのだった。台の上の男のほうでも、剥がれた腕の皮に繫ったままの手では、指が痙攣せんばかりに開いており、それが死人のものではないことが紛れもない。それよりも、空を睨んでいる男の視線は、恐怖と苦痛に幽^{カクレ}みながらも隣の女の生贄への気がかりを放棄しきれずにいるのが判る。

どちらの生贄も、憔悴した顔をしている。それだけ虐まれば、そうならない人間はないはずである。とは思うものの、剥ぎ露わされた、男の筋力是不相応に逞しかった。女の残っているほうの乳房も、それが打ち落された跡が語っている、先程までそこにあつたはずの乳房のほうも、やはり憔悴した女の顔には不相応に豊満だった。そして、皮を剥がれた部分の男の筋肉も、女の乳房の失せた跡も、どこまでも薄緑を基調として描かれており、僅かに真紅があしらわれている。高いところに小さな四角い窓を描いて、一条の陽を射し込ませてあるから、一種の殉教図なのかもしれない。が、彼女はそう見立てると、そんな小さな窓から来る外の空気くらいでは、何の助けにもならないほど、自分が息苦しくなっているのに気がついた。

〈二組の執行人〉とあるその絵画の写真を雑誌で見かけた時、彼女は一旦、同胞を感じた。が、見るほどに、彼女はそうではなくなりだしたのだった。作者は史上に名のある画家で、同じ作者の手に成る肖像画や自画像も併せて載っているが、グロテスクなのは〈二組の執行人〉だけで、そしてその絵だけが、彼女を息苦しくさせるのである。

彼女はこれまでに、幾つかの殉教図を見たことがあつた。念入りの刑具を用いた、処刑図も見た覚えがある。が、彼女は今度のような経験は、初めてだった。一旦、同胞を感じると、いつもは迎合されているような気持になり、立ち優れた気持になる。その立ち優れた気持に達するのはきわめて速く、そして、彼女の視線は見ている物にながく留まることなしに移ってしまう。

しかし、△二組の執行人△はそうした類いの絵画としては、決して特殊の物ではなさそうである。彼女は、これまでに見た、殉教図や処刑図や拷問図をもう一度見たならば、以前には感じなかった、このような息苦しい気持を味わうのだろうか。

見つからない物を探す時くらい、彼女が執拗くなることはなかった。探している物に二度と行き会えないかもしれないと思うからではなくて、見つかる筈の物が見つからないと思うから、諦めきれなくなる。それを見つけること以外には、一切の望みが失せてしまったような気がする。

何も彼も、それが見つかった時から始まるのであって、見つからないうちは、すべてが堰かれてしまっているような気持になる。例えば、見つからない爪切りの光り具合と小ぢんまりした重さ、あるいは代りに着る物がないわけではないが、どう考えても処分した覚えのない、木綿の服のさっぱりした肌触り——それを再び感じるまで、彼女は探すことがやめられない。子供の頃からそうであった。「そのうち、きっと出てくるから、もう寝なさい。今、探したって、見つからない。魔が隠しているのだから」と親たちに言われたことも少くない。子供ながらに、彼女は魔なるものを信じているわけではなかったが、魔が隠している、という言葉には一抹の恐怖を与えられずにはいなかった。魔に隠されていると言われているのが、自分のものなので、感じが伴う。見つからない苛立たしさと疲れをもてあましている彼女は、そこへさして、その恐怖に掠め

られると、激しく泣きだした。親たちは、彼女が泣きだしたのは、寝るように、探すのをやめるように言われたからだ、としか思わないのだろう。明日また一緒に探してあげるとか、昼間ゆくり探せば見つかるとか、言い宥める。が、泣きだした途端に、彼女は実のところ忽ち解放されてしまっている。親たちの宥めが快かった。見当ちがいなので、泣くことですべてを転じ去った彼女には、却って快かった。彼女は泣きたいだけ泣くのだが、泣きだした途端にその必要はなくなっているわけなので、おのずから程なく泣きやんでしまう。宥めに素直であったようなもので、親たちには褒められ、すべてがうまい具合に完了する。

行き会いたい物が見つからなくても、子供の頃のような転じ方の得られない今の彼女は、物が見つからないと全く自分に挺摺った。彼女が、彼に心当りを問う頃には、彼女は早くも自分に挺摺りはじめていたのであった。彼女は、自分の口調でそれが判った。つとめてさりげなく問うことにしているし、気持もまた素直であるつもりなのだが、口調がそれらしくならない。何となく、苛立っている感じが否めないのだ。

「——ここにはなかったわね」

彼女は〈二組の執行人〉の載っていた、雑誌の名前と月号を言って、半ばひとりごつのように訊ねながら、彼の部屋へ入って行った。半ばひとりごつのような訊ね方が工んだものであったので、自分に挺摺っている困惑が却って現われてしまっていた。

「ないと思うよ」

彼は腹匍いになって新聞を読みながら、彼女の困惑を感じつつ無視するように答えた。が、彼の言うことは、本当にはちがひなかった。雑誌は教養誌で、本屋から毎月届けさせているものだが、読むのは主に彼女であった。彼は稀に手に取ることはあっても、少し翻して眺めただけで、その場に措いてしまう。自分の部屋に持ち込むようなことは先ずない。そして、彼女はあの（二組の執行人）の頁を彼に示しもしなかったのである。

「わたしもないと思うけれど」

彼女のその応えは、やはり半ばひとりごとのようであった。工^{たく}んだものでもあった。ここにはないとは思ふ彼の部屋でありながら、彼女は調べてみずにはいられなかった。そのためには、却って半ばひとりごとのように曖昧に応えておく必要があるのだった。彼女はそう応えながら、乱雑な彼の本棚の前に進むと、その雑誌に似た体裁のものが乱れている個所に手をかけた。

「ありやしないよ」

彼は言葉だけを彼女に向けた。「——いつもの所に置き忘れてるんじゃないのかい？」

「いつもの所ってどこ？」

「よく自分の物を置いている所があるじゃあないか」

「わたしのどんな物を？」

「いろいろ置いているじゃあないか。あっちの丸いテーブルの下なんか——」

「あんな所にあるんだったら、とっくに見つかっていますよ」

よくもこんなに、背を向うむきや横むきにしたのが幾冊もあったものだ。押し込んである本や雑誌があちこちでそうなっていて、その雑誌らしいところを彼女は引き出してみずにはいられない。そのたびに、探しているのとはちがった表紙が現われる。

「おいおい、あんまり引っ掻きまわさないでくれ」

彼は腹匍ったまま、彼女のほうへ頭をめぐらして言った。「代りに読む物ないのかね？」

と役には立たないことを言う。探し物をする時の彼女の状態を知らない彼ではない。わざと無視した言い方になる。無視し通そうとする。で、彼女は物の見つからない苛立ちを転じる機会が容易に擱めず、一層苛立つ。

彼女は、もうそこには留まっていられないほど、苛立ってきた。彼に無視されながら、どうしてもそこにあるとは考えられない本棚など探していて、何になるのか。

「魔が隠しているのだと思うよ」

彼が言った。

彼女が探し物に遂に行き会えた時のことでもあったのだろう。彼女は、子供の頃から探し物に固執したことを話して、親たちによく言われた、その言葉を聞かせたことがあったのである。